遊戯王～赤椿の騎士～

愁彩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王～赤椿の騎士～

【Ｎコード】
Ｎ０７９３Ｎ

【作者名】
愁彩

【あらすじ】
受験を直前に控えた高校３年の椿（つばき）　聖苗（せな）。しかしひょんなことから、次元を超えてアカデミアのデュエル場に！？

ギャグあり！！ラヴコメあり？シリアスあり！？
ＧＸの２次創作なのに本編からナノーネのみの出演！？

山下和男のオリジナルストーリーをお楽しみください！！

注意

オリカが出ます。
苦手な人はご遠慮ください。

第1話　試験は試験。（前書き）

どうも、焼けに焼けてる山下和男です。

クウォリティのことでいらっとしたので新作品！！（意味分からん）

ＧＸの作品にシンクロは出せないよなあ、けど５Ｄｓは書きづらいし……。

ってな感じの作品！！（わかるか！！）

それではお楽しみください！！

第1話　試験は試験。

「いたたたた……。」

なんか何処からか落ちたような感じがしたような……。
顔面から着地するのは痛すぎる…。

「…なんでこけたん……？」

顔を上げるとそこはデュエル場。塾の帰りだったはずなんだが……。
疲れで夢でも見てんのかなあ。受験間近なんだけどなぁ……。
とりあえず立たないと……。

パサッ

「げ。これ、デッキ！？こんなもんなんでもっているんだか……。」

……。よく見るとなんか来てる服違うような…。学校の制服じゃない。

「……。でも俺のデッキだ。ダンディ、スポーア、ロンファ……。」

植物。ガチで使ったデッキだ。あれ、だけど大会で使っていた時のデッキじゃなくて少し内容が違う…。もしかして俺のじゃない？
……。でも周りは誰もいない。つまりこれは俺のデッキ…。

「目の前のデュエル場といい、今は持ってないはずのデッキ、しかも内容が微妙に違うデッキといい、どうなっているんだ？」

全然状況が把握出来てない。
……夢か。そうか、夢だな…。
頬を抓ってみるか。

「い…いはいっ！（痛いっ！）ってことは夢じゃない……。」

……どうなっているんだ??

俺は椿（つばき）聖苗（せな）。男っぽい名前じゃないからよくからかわれたが、それは昔の話。今は高校3年、受験間近。遊戯王はやっていたと言えばやっていたがさすがに高校3年になってからは出来るはずがない。しばらくは机に封印していたけど何故かメインデッキがここに……。というかここに何故いるかわからないし。

ん?ポケットに何か入っている。
「受験番号１２０……?」

これ、大学の奴か?確かに１２０だったけどさ、なんでここに?

「受験番号１２０番!出てくるノーネ!」

衣服は違うし……。しかも制服にも入れてたっけ?
そうだ。この服がこの世界のだとしたら、きっとこれもこの世界の……。

「…１２０って今言った…？」
「受験番号１２０番！とっとと出てくるノーネ！」
「これかっ！？」
とりあえず急いでデュエル場に向かった。

「遅いノーネ！最後だからって寝てたら駄目ナノーネ！！」
「別に寝てたわけじゃ……。」
「うるさいノーネ！とっととデュエルするノーネ！！」
理不尽！！遅刻しただけでこの扱い！？
「遅刻した罰ナノーネ！！わたくし～とデュエ～ルするノーネ！！」
「……まぁ。それじゃあとっととやりましょう。セットは……よし、完了！いざ！！」
「「デュエル！！」」
「わ～たくしのターン！ドロー～ニョ！」
じゃ、ジャンケンで決めないの！？いい歳した大人が先攻を奪っていいのか？

「手札より～魔法カード”テラフォーミング”発動ナノーネ！デッキから”歯車街”を手札に加えて発動ナノーネ！」

…。”歯車街”か……。選考会でこれとあの龍を入れたデッキがあったな…。

破壊すると”古代の機械”と名のついたモンスターを特殊召喚、更に発動時には”古代の機械”と名のついたモンスターの召喚のためのリリース数が1少なくなる…。

破壊したいが特殊召喚されるのは嫌だしかといって野放しにしてたら展開されるしなあ……。

「そして”歯車街”の効果発動ナノーネ！リリースを1少なくして出てくるノーネ！”古代の機械獣”！！」

お、”古代の機械獣”。レベル6で攻撃力２０００は低いけど効果が厄介……。

…ホログラム……。もしかしてアニメの世界か？クロノス先生って確かＧＸ……。

十代とかいるのか？ってかこのデッキシンクロあるけど……。

一応エクストラ確認するか……。

「……もろにシンクロあるし。」

「そし～て！”古代の機械城”発動！カードを1伏せてターンエンドナノーネ！！」

フィールド場の”古代の機械”と名のついたモンスターの攻撃力を３００アップさせる永続魔法…。”古代の機械獣”の攻撃力は２３００か……。

この植物デッキの前は”古代の機械”メインで使っていたからな。

それくらいは覚えている。ある意味助かったかな。クロノス先生で

さ。

「俺のターン……！クロノス先生、貴方の負けです！！」

「このわ～たくし～が、負けるな～んて、ありえないーノ！」

「論より証拠か…。ドロー！！」

もしアニメの世界なら、ＬＰ４０００のはず。だったら勝てるはず……！

「まず”ダークヴァージャー”を召喚！」

ホログラムに変な芽が出て来た。正直、キモい……。

「攻撃力１０００～の貧弱モンスターがわ～たくし～の”古代の機械獣”に勝てるわけないーノ！！」

「そして手札から”超栄養太陽”を発動！”ダークヴァージャー”をリリースしてデッキから”ローンファイヤーブロッサム”を特殊召喚する！」

変な芽が成長して……。またしても微妙な感じになった。元があれだからか？んな訳ない。

「だからそんな貧弱～なモンスターに…。」

「”ローンファイヤーブロッサム”の効果発動し、こいつをリリース。そしてデッキから”ギガプラント”を特殊召喚！」

そして更に成長し……。食虫植物か…。まぁそんな空気は出てたな。最初の時点でさ。

「に…２４００！？」

「まだまだ！！手札から装備魔法”スーペルヴィス”を”ギガプラ

ント”に装備！」
「”スーペルヴィス”！？何する気ナノーネ！？」
「”ギガプラント”の効果発動！墓地の”ローンファイヤーブロッサム”を蘇生！そして手札より”融合”を発動！！」

このデッキの展開力。かなり不安定ではあるけど揃えばバンバン出せる。こういったらなんだけど、攻撃時に発動する効果モンスターなら攻撃力さえ勝れば畳み掛けて攻撃が出来る！

「手札の”炎妖蝶ウィルプス”とフィールド場の”ギガプラント”を墓地に送り、キーモンスターだ！出て来い”超合魔獣ラプテノス”！！そして墓地に送られた”スーペルヴィス”の効果発動！墓地にいる”ギガプラント”を蘇生！！」
「そ、それでもまだとどめはさせないノーネ！！1ターンキル宣言したな～らちゃんと出来ないと入学させないノーネ！！」
「…何処まで理不尽何だよ……。まぁ見てなって！”ローンファイヤーブロッサム”の効果を発動し、デッキから出て来い、赤き椿の姫、”椿姫ティタニアル”！！」

かなり品のある、この世のものとは思えないほど美しい椿の花を身にまとった、いやそれ自身がティタニアルなのであろう。

（久々じゃのう。わらわがこのような遊戯の場に出てくるのは……。）
「……へ？」
なんかティタニアルがしゃべったような……。気のせいか？
「まぁいいや。途中だったな！”ギガプラント”の効果発動！墓地ある……。」

「ちょっと待つノーネ！イカサマは許さないノーネ！その”ギガプラント”は再度召喚も”スーペルヴィス”も装備してないノーネ！だから効果は……。」

「発動する！！”超合魔獣ラプテノス”の効果により、フィールド場に存在するデュアルモンスターは再度召喚した状態になる！！よって”ギガプラント”の効果で三度”ローンファイヤーブロッサム”を特殊召喚！！そして効果発動！デッキから”ボタニカルライオ”を特殊召喚！！！」

ツタがだんだん大きくなって、花が咲いてライオンのような形になった。

「自身の効果で”ボタニカルライオ”の攻撃力は９００アップ！！２５００と”超合魔獣ラプテノス”２２００、”ギガプラント”２４００、”椿姫ティタニアル”２８００！！伏せカード１枚で防げるなら防いでみろ！！バトル！！」

ま、いくら伏せカードがあったって無駄って言ったら無駄だけど。

「”ギガプラント”で”古代の機械獣”を攻撃だ！！」

食虫植物が、機械で出来た獣にツタでまきつき始めるが……少しずつ、何かがはがれてきた。

「リ、リバースカードオープンナノーネ！”炸裂装甲”で”ギガプラント”を破壊するノーネ！！」

（ふんっ！！）

しかし”ギガプラント”は破壊されなかった。”ボタニカルライオ”が突然現れて、消えていった。

「ぎゃあああ！？」

クロノスＬＰ３９００

「な、何が怒ったノーネ……。」

「”椿姫ティタニアル”の効果発動！フィールド場の植物族モンスターをリリースすることでカードを対象にする効果を無効にし、破壊する！！」

つまり、”炸裂装甲”の対象になった”ギガプラント”のために”ボタニカルライオ”が生贄となり、呪縛を解いたという感じだ。

「よって”古代の機械獣”は破壊された！！ちゃんと１ターンキルだぜ、クロノス先生！！！”超合魔獣ラプテノス”と”椿姫ティタニアル”でプレイヤーにダイレクトアタックだ！！」

”ラプテノス”が口から光線のようなものを吐き出し、クロノス先生に直撃。

クロノスＬＰ１１００

（わらわに歯向かった罰じゃ！！食らうがよい！！）

”ティタニアル”は椿の花びらを宙に浮かべると、プレイヤーに指差した。そこに向かって椿の花びらが飛んでいった。

クロノスＬＰ０

「こ、このわたくし～が負けるなん～て！ありえないーのいーの！

！」
「でも勝ちは勝ち！！」
デュエル場は一瞬にして、歓声に包まれていった。

（そなたがわらわの新たな主人か？）
「えっ！？げ、幻聴……！？」
よくよく見ると、ソリッドヴィジョン外で”椿姫ティタニアル”がいる。
（幻聴ではない！そなたには見えるであろう！この美しきわらわの姿が！！）
GXの世界なら遊戯十代のように、カードが実体化したような……。

「”ティタニアル”の精霊…！？」
（そうじゃ。わらわは椿姫ティタニアル。そなたによってこのカードに宿ったいわば精霊じゃ。）
「精霊……。ティタニアルはティタニアルって名前か？」
（そうじゃ。）
「ティタニアル……。長いから”ティタ”でいいか？」
（そなたの好きにせい。どっちにしろわらわはそなたの精霊じゃ。主人のいうことには従うのじゃ。）
「そうか。じゃ、これからよろしくな、ティタ！！」
まぁよくわからないがとりあえず周りに合わせようか。この世界は

遊戯王ＧＸの世界っぽいところで、俺はアカデミアに入学するって感じだな。
何が起こるか分からないけど、ティタと共になんとかやっていくとしよう！！

「……すごいなぁ。あのクロノス先生に１ターンキルだなんて。って聞いてる??」
「……かっこいい……。」
「……おーい。……駄目だこりゃ。」
観客席にいるある少女は観客に向けてガッツポーズをしているセナに釘付けだった。

第1話　試験は試験。（後書き）

早めにヒロインだしたいので一応登場ｗｗｗ

植物デッキはわたしの愛用デッキなんで、だそうかなと。
ちなみにスキドレ植物です。えっ？誰も聞いてない？えと、すみません……。

主人公にはスーペル植物を使わせてみました。安定しないのを主人公補正でｗｗｗ
シンクロは後々にだそうかなと思ってます。ストーリーの鍵ですから。

キャラ紹介など活動報告で書かせていただきます。

それでは、次回をお楽しみに！！

第2話　同調する戦い（前書き）

第2話です。

夏休みの方が確実に投稿遅いというわけわからない状況を生み出している山下和男です……。

しょうがないじゃないですか！
わたしだって忙しいんですよ！？

それより、第2話です。
ヒロイン（？）登場なのですよ！！
そしてあのキャラのその後（想像）が出てきます！！

それではお楽しみください！

第2話　同調する戦い

とりあえず把握出来たのが、年齢が中学3年、つまり3年分若返っている。それと実技は高得点、なのに筆記5点（最初の5問正解、なんと解答欄をずらしていた。）なのでレッド寮に入る事となった。

「レッド寮か……。何かの因果がありそうだな……。」

ここの世界、よく分からないけどレッド寮に女子が何人かいる。いて大丈夫なのか！？とは思うが寮が2棟になっていて小さい方に女子がいるらしい。噂によると、夜な夜なレッド女子寮へいくと、魅惑の女王に廃寮につれて行かれるらしい。

（そなたには精霊が見える。噂の真意が分かるであろう。）

「確かにな。て言ったって、ティタ以外まだ見えてないし。十代がいればなあ……。」

あともう一つ。どうやらGXから大分時間が経っているらしい。ブルー寮の前にプロデュエリスト、カイザーこと丸藤亮の銅像がある。いろんな人に聞けば、弟もプロになったとか何とか。ブリザードプリンスもプロを盛り上げていき、アカデミアの人気が急増。１０００人近くこの島にいるらしい。

「今日の調査はこれくらいかな。寮に戻るぞ、ティタ……って！？」

（キャウゥゥ！！）

（ダンディライオンじゃのう。この島にいたとはのう……。）

「ま……前が見えねえ……。」

（キャウゥゥ……。）

顔から引きはがして見たものの、かなり哀しそうな顔をしたからかなり罪悪感が精神的ダメージを与えたので……。

（キャウゥゥ♪）

「頭に乗っけるのも悪くないな。うん。」

（わらわも疲れたのじゃ。寮までおぶってもらえんかのう？）

「……却下する。」

（ぐぬぅ！このティタニアルを愚弄するとは何様のつもりじゃ！！）

「テメェの主人様じゃ！！」

この世界に来てから専らティタとしか話してない。もちろん聞き込みを除いて、だ。　入学までまだある程度時間があるのでとりあえず現状把握のため、群がらずに個人で調査。その結果、この姫さんとの会話が増えていくわけだ。

（キャウ！）

「っておい！前見えねえってば！！」

（……そなたもいろいろ大変じゃのう。）

本当だよ。察しろよ。

（やじゃ。）

「ってか心読むな！！」

レッド寮

まぁ普通は相部屋で複数人部屋にいるはずだが、何故か、何故か知らないけど1人だけの部屋。

（正確には2人と1匹じゃ。）
（キャウッ！）
「だから心読むな！！読心術でも習得しているのかお前は！！」
（主人のことはだいたいわかる。なにしろ主人なのじゃからな。）
（キャウ♪）
「……ダンディライオンもか……。そういやこいつの名前つけてないな。」
（キャウ？）

別に名前はつける必要ないのだろうが、ティタには一応……本当に一応つけたわけだし…。

（一応とは何じゃ一応とは！）
「いちいち突っ込むな！面倒くさい…。」
（キャウ、キャウ！！）
「……お前も落ち着いてくれ…。」

こいつらのせいで……。

（わらわのせいじゃと！？）
「黙れこの読心（独身）姫！！！」

とりあえず、話がズレにズレた。なんとくじ引きでおじゃ万丈目が使っていた部屋になったのだ。そしてよくわからないが、広いのに1人部屋。ベッドが一つしかないという理由で1人部屋……。

（わらわ達がおろう。）
（キャウッ！！）
「ありがたいような、ありがたくないような……。そいや名前考えなきゃな。」
（キャウッ♪）

ダンディライオン。
ダオン。なんかダオ○っぽいな。却下。
イオン。化学物質か！？却下。
ディライ。なんか人っぽい。却下。
ダライ。ダライ○マ！？却下。

（ネーミングセンスの欠片もないのう…。）
（キャウゥゥ…。）
「うっさい！ほっとけ！！」

ティタに言われるとか……。
まぁ事実だけどね？だけどね！！

（ディリオン、というのはどうじゃ！？）
「……いいなそれ。決定。」
（キャウッ♪）

なんか…、なんかムカつくけど、ティタがいったのがムカつくけど……！！

（わらわは椿姫じゃからな！）
「…つーか可愛さがでない名前だな。」
（キャウッ♪キャウッ♪）
「……気に入っているようだからいいか。」

とりあえず、入学前の詮索は終了、かな。アカデミア生活に埋もれるのも悪くない。帰れる方法はゆっくり探せばいいさ。

「適当に座るか……。」
（キャウッ♪）

今日から授業と伝えるとティタは面倒だから部屋で寝るといってついて来なかった。まったく自由気ままな姫様だ。
それに引換え……。

（キャウ？）
「何いっているか分からないけど、癒されるからいいか。」
（キャウッ！！）

まぁいいか。うるさいのいないから。

「お。お前ってクロノス先生を倒した椿セナか？あの植物使いの何だっけ……。」
「アカデミアに現われた期待の新生”赤椿の騎士”こと椿セナ、だよな！？」
「カ、”赤椿の騎士（レッドカメリア・ナイト）”！？なんだそれ！？」
「誰かがいってたぞ。ティタニアルは姫で守るために戦う騎士だって。紹介が遅れたな！俺は坂本タケル！！タケルでいいぜ。」

「あのクロノス先生を倒すなんてすげぇーな！俺は竜童カケル！アニキと同室さ！」
「ん？アニキ？？」
「俺のことをアニキって言うんだ、こいつ。それよりもなぁ、放課後デュエルしようぜ！お前とデュエルしたかったんだ！！」
「……アニキ、デュエル馬鹿だから。」

なるほどな、ていう感じで頷く。
とりあえず、友達…？が出来た。しばらくは何とかいけるかな。

「はい、じゃあ席着いて！授業やるわよ！」
「ん？どっかで見た事あるような……。」
「先生だからどっかで擦れ違ったんじゃないか？それより俺は寝る！！」
「アニキ……。えっと確か明日香先生っていう名前だったかな。アカデミアの卒業生らしいよ。」

明日香……。ああ。道理で。

「セナさん、どうかしたのか？」
「いや、何でもない。」
（キャウゥゥ♪）

授業中にひたすら動くディリオンに困惑はしたがカケルは精霊が見えるようではなく、先生も見えるか怪しいので我慢することになった。

「よしっデュエルだ！」

「授業終了早々に言う言葉かよ……。」
「セナさん、アニキの脳内は常にデュエルだよ……。」
「よく寝たし！さぁ行くぞ！デュエル場！」

とタケルが机から離れようとした時、誰かが物凄い勢いでタケルの襟を引っ張った。もちろんこんな事が出来るのは生徒なわけがない。

「タケルくん、ちょっといいかしら？授業中何故寝てたかじっくり聞かせて頂戴…？」
「だ…駄目です！今からデュエル場に行くんだあああ！！！」

「…先、行くか。」
「……だね。」

「あ！カケル！セナ！待って……！」
「待ちなさい！させないわよ！！」

先生とタケルが攻防している間に俺とカケルは先にデュエル場へと向かった。

ソリッドヴィジョン。もちろん元居た世界にあるわけもなく、クロノス先生とのデュエルで初めてみたわけだ。

「そんでティタに会ったんだなあ……。ってあれ？いない……。」
「どうしたんだ？セナさん。」
「あ、いや、何でもない。」

見えない人に言っても意味ないからな。精霊に関しては。
授業後まではいたと思うけど、ディリオンがいない。ティタに会って以降必ず1人（1体といった方が正確か？）はいたからなんとなく寂しい気もする。

「とりあえずデュエルするか、カケル。」
「え？俺？だ、大丈夫かなあ……。」

デュエルしようか、そう思ったそのとき、2人の女子、レッド寮とブルー寮のようだ、が行く手を阻んだ。

「…ん？なんかようか？九日？」
「……しょ、初対面でギャグかますとか…。本当にいいの？こんな人で？っていうか本当に”赤椿の騎士”なのかしら…。」
「……う、うん……。あの……！」

「えと、わ、わたしと、つ、つ、付き合ってください！！」

「えええ！？いきなり！？」
「外野は黙っていなさいね。」

「うん、わかった。それじゃあカケル。先客出来たから待ってて。俺、こっち使うから。」
「え？あ、え？」

「そして物凄く勘違いしてる！？」
「……なんちゅう鈍感さよ……。」

「俺からいくよ。ドロー！」

うん。悪くないな。手を抜くのは主義に反するからトップスピードでいきますか。

「手札より”ローンファイヤーブロッサム”を召喚し、効果発動！！デッキから”ギガプラント”を特殊召喚、手札から”スーペルヴィス”を発動し、”ギガプラント”に装備して”ギガプラント”の効果発動！！墓地から”ローンファイヤーブロッサム”を特殊召喚して”ローンファイヤーブロッサム”の効果発動し、デッキから”スポーア”を特殊召喚！」

「ティタニアルじゃない…？」

「手加減無しのようね…。ヒカリが先攻じゃないのが幸いだと思うけど……。」

「……どういう意味だ？」

「”赤椿の騎士”のターンが終わればわかるわよ。」

「そして”スポーア”と”ギガプラント”をシンクロさせる！！出てこい、”パワーツールドラゴン”！！」

攻撃力２３００。こいつの怖さはその効果の強さだ。

「”スーペルヴィス”の効果発動！墓地の”ギガプラント”を特殊召喚！そして”パワーツールドラゴン”の効果発動！デッキから”スーペルヴィス”２枚と”団結の力”を選んでシャッフル。さ、選んで？」
「え？わたしが、ですか？？」
「うん。」

ここら辺は運が絡んでくる。まぁ６６％”スーペルヴィス”だ。”団結の力”が来ても悪くないけど。

「じゃ、じゃあこれで……。」
「ほいじゃもっぺん”スーペルヴィス”発動して”ギガプラント”の効果で”ローンファイヤーブロッサム”を特殊召喚、効果でデッキから”グローアップバルブ”を特殊召喚してまたまたシンクロ～♪”パワーツールドラゴン”！！”ギガプラント”を蘇生させて次は”スーペルヴィス”と”団結の力”２枚ね。」
「えっと……ではこれで…。」
「三度”スーペルヴィス”！！君と俺って相性いいのかな？まぁいいや。墓地の”スポーア”を特殊召喚して”パワーツールドラゴン”をシンクロ召喚！！」

「な、何なの、あの召喚回数！？”パワーツールドラゴン”って何よ！？植物使いのはずじゃあ……！？」
「まだ知り合ったばかりだから詳しくは知らないけど……。」

「”ギガプラント”は場に戻すと……。」

本当だったら”スターダストドラゴン”を出したかった。だけどこ

のデッキにはなかったから召喚出来るはずがない。
「まぁこんなもんかな。2枚伏せてターンエンド。」
「わ、わたしのターン…ドロー！」
とりあえず展開は出来た。まぁここまでうまくいくとは思わなかったけどね。
ただいきなり全体除去カードがくると嫌だな。まさかそうはならないだろうけど。
「手札から”マンジュゴッド”を召喚します。効果発動、”神光の宣告者”を手札に加えます。そして魔法カード”宣告者の予言”を発動…！手札の”紫光の宣告者”とフィールド上の”マンジュゴッド”をリリースして、”神光の宣告者”を守備表示で儀式召喚！」
”神光の宣告者”！？”紫光の宣告者”といい、間違いなく宣告者パーミ。先攻じゃなかったら確実に封殺されてた……。
「カードを2枚セットしてターンエンドです……。」
手札1枚。揺さぶりをかけてみるか……。
「俺のターン、ドロー！墓地の”グローアップバルブ”の効果発動！デッキから1枚墓地に送って……。」
……薔薇の刻印。”パワーツールドラゴン”の効果は次がラストか……。
「”グローアップバブル”を特殊召喚。そして”ギガプラント”と一緒にリリース！来い、”椿姫ティタニアル”！！」

（わらわの出番かの～。）

……いたのかよ。

「”パワーツールドラゴン”の効果発動、”団結の力”2枚と”薔薇の刻印”だ。」

「じゃ、じゃあこれで……。」

「よし、”団結の力”を”椿姫ティタニアル”に……。」

「あ、”神光の宣告者”の効果発動します。手札の”センジュゴッド”を墓地に送って無効にして破壊します……。」

……だろうな。

「そいじゃ、ターンエンドだな。」

２８００の壁。正直、このデッキに２８００を超える攻撃力を持ったモンスターはいない。自力で”団結の力”ひかなきゃいけない。劣勢に立たされた方がいいドローしそうな世界だからそれより先に立場が逆になるかもな。

「わ、わたしのターン…ドローです！……ターンエンドです。」

伏せカード2枚、手札1枚、場のモンスター1体。

「俺のターン、ドロー。……ターンエンド。」

２８００の打点で防がれるモンスター。あのデッキだったら……。いや、文句はいってられない。遊戯王で言い訳はしちゃいけない。

……長期戦になると不利かな。

この状況を打開するには、何が出来る…？

「わたしのターン、ドローです。……エンドです。」
「俺のターン、ドロー！」
……行けるか？
いや、やるしかない…！！

第2話　同調する戦い（後書き）

本当はデュエルを終わらせたかった……。
前後半にしたら楽しみ増えるかなあと。
ぶっちゃけサボりだけどさｗｗｗ

明日香、アカデミアの教師になる！！
翔もおそらくプロになるのかなあって。
おじゃ万丈目は知りませんｗｗｗ
三澤くん……。欠片も出てこない空気感！

十代はどうしましょうか？まぁいいや。

ヒロイン（？）の突然の告白を完全にスルーの主人公！
まぁこの先どうなるのでしょうね～？

それでは、次話でまた会いましょう！

第3話　うごめく影（前書き）

だいぶ時間がかかりました。

セナＶＳヒカリの決着と物語の動き始めです。

物凄い簡易な前書きですが許してちょんまげ……ｗｗｗ

第3話　うごめく影

……何度か無効されるか。その何度が本当に何度かわからない。まぁわかったら人間じゃないわけで。伏せカードも気になるしなあ……。

「八方塞がりね……。”赤椿の騎士”は”神光の宣告者”を破壊したいけど、無効にされるのを考えて展開しなくてはならない。ヒカリは”赤椿ティタニアル”の存在や”神光の宣告者”のコストがあるから手札からなかなかモンスターを出せない……。」

「セナさん……。」

兎にも角にも”神光の宣告者”を破壊しない限り俺に勝機はない……。

「”フェニキシアンクラスターアマリリス”があれば大分変わるのになあ……。」

無いものねだりは仕方ないか……。

「う〜〜。ターンエンド。」

伏せは2枚。相手も攻めに攻められ……。

「”波動キャノン”を発動します！！」

「何っ！？」

最悪だ…。かなり最悪な状態だ……。
サイクロンはある。が、無効にされる。
破壊する方法は他に……。

「私は、ターンエンドです。」
「俺のターン……。”パワーツールドラゴン”を2体リリースして”椿姫ティタニアル”をもう1体召喚！！」。
（（わらわが2人となっ！？いていいのかのぅ……。））

ステレオかよ。

「…ターンエンド。」

2体並べたって攻めに攻められない。２８００を超えるか、破壊するかしないといけないのに出来ない……。チャンスはあと3回…。

「わたしのターン、1枚セットしてターンエンドです。」

ほとんどドローゴーかよ。
くそっ！どうすりゃいい……！？

（（落ち着くのじゃ。））
「えっ？」
（（わらわの主人であろう。落ち着くのじゃ。きっと打開策を見つけられるはずじゃ。まだ3回はドロー出来るのじゃ。））

ティタ……。

「そうだな。デュエルはここからだ…！俺のターン、ドロー！！」

……こいつは！よし、いける！！

「モンスターを1体セット、カードを1枚セットしてターンエンドだ！」

「……表情が変わった。」

「え？」

「いや、何でもないわ。ここにきて何するつもりかしら……。」

「わたしのターン、ドロー……。ターンエンドです…。」

いける……！！

「まずリバースカードオープン！”エネミーコントローラー”！伏せモンスターをリリースして”神光の宣告者”のコントロールを……。」

「手札から”朱光の宣告者”を捨てて無効にします！」

（ピギッ！）

ムッ……。

「そいじゃ”ダンディライオン”の効果発動！墓地に送られたとき綿毛トークンを2体特殊召喚する！！」

（キャウ！）

ディリオンから綿毛が飛んで、トークンが召喚された。

なかなか可愛らしい……って考えている場合じゃない！！

ん？そういえばさっきから彼女はティタをみているような……。

「まぁいいか。俺のターン、ドロー！綿毛トークンをリリースして”妖精王オベロン”を守備表示召喚！！」

「”妖精王オベロン”！？」

「こいつはフィールド場の植物族モンスターの攻撃力・守備力を５００アップさせる！！”椿姫ティタニアル”の攻撃力は３３００！！」

「嘘っ…！？」

「バトル！”椿姫ティタニアル”で”神光の宣告者に攻撃…！！」

（わらわの技を受けるがいい！！）

「リ、リバース発動！”炸裂装甲”…」

「”椿姫ティタニアル”の効果発動！対象をとる効果をフィールド場の植物族モンスターをリリースして無効！！リリースするのは綿毛トークン！！」

「”神光の宣告者”の効果発動、”雲魔物スモークボール”を捨てて……」

「カウンター罠発動！”天罰”！！”ボタニティガール”を手札から捨てて無効！！よって効果が通り、”神光の宣告者”を破壊する！」

（ふんっ！！）

「……！！」

「そしてもう１体の”椿姫ティタニアル”でダイレクトアタック！！」

（わらわに勝てると思わぬ事だな！）

「リバース！”リビングデッドの呼び声”！！”神光の宣告者”を特殊召喚！！」

「なら、続行！」

（2度も現れるとは！邪魔じゃ！！）
「……！」
「とどめだ！！”パワーツールドラゴン””ギガプラント”でダイレクトアタック！！」
ヒカリ　LP0
「また……負け…ですか……。」

「”赤椿の騎士”……。椿聖苗ね。要注意人物かしら。でも、計画に気付いていないようね。いずれにせよ敵になるのかしら…。フフフ……。」

（ピギッ！ピギッピギッ！！）
「励ましてくれている…のですね。ハハッ、負けてばっかです……。」
やはりあれは宣告者。しかも精霊のようだな。

（わらわ以外にも主人を持つ精霊はいるのじゃ。主人は必ず精霊が見えるはずであろう。話して見るといいのじゃ。）
「そのつもりだよ。」
俺はデュエル場から降りて、彼女の方へ向かった。自己紹介もまだだし、聞きたいこともある。
「いいデュエルだった。ありがとう。自己紹介まだだったよね。」
「えっ？あ……大丈夫です。セナさんですよね？」
「あ、うん……。」
「わたしは神谷ヒカリと言います。えと、お願いします！」
「よろしく！……それで”宣告者”たちって精霊か？」
「えっ！？」
（ピギッ！？）
うわっ。驚いたときの顔かわええ……。
「あのっえとっその……。」
（そちもわらわが見えるであろう。）
（キャウゥゥ！）
「あ、頭からダンディライオン！？それにティタ、ティタニアル……！？」
「こっちはディリオン。こいつはティタだ。」
（わらわを見れるほど身分は高そうに見えないのじゃが、それなりなのじゃろう。よろしくなのじゃ。）
（キャウッ！）
（ピギッ！）
……宣告者とディリオンが意気投合してる。
ってかティタ、身分とか言うな。

「ま、お互いこれからよろしくだな。」
「…は、はい！」

「わりぃわりぃ。明日香先生に捕まっちまって……。デュエルは？」
「今終わったし、そろそろ夕飯だから帰ろうぜ、アニキ。」
「何～～～～！！？？」
「そうね。わたしも帰ろうかしら。ヒカリを頼むわね。」
「「へっ？」」
「わたし、ブルー寮だもの。ヒカリはレッド寮だから寮違うのよね。」
「なるほど……。」

男3人、女1人。よくあるバランスかなとは思う。

（わらわもおなごじゃ。）

ええぃ！喧しい！！

「えと、ティタさん？」
（なんじゃ？）
「急に何です…か？」
（主人が男3人女1人とか考えていたのじゃ。だからわらわもおなごじゃ、1人にいれたもう、ということじゃ。）
「な、なるほど……。よく、わかりますね。セナさんの心の声。」
（精霊と主人は繋がっておる。宣告者たちもそなたの心が分かるで

あろう。）

わかるならわかるでいいけど、いちいち突っ込むのは止めて欲しい。正直、ウザイ……。

（ウザイとは！！この高貴なる椿の姫を…。）

「いちいち反応するところじゃ！！！」

「なぁ、何騒いでんだ？セナ。」

「いくらセナさんでも騒ぎ過ぎじゃない？」

（反省するのじゃな！）

もちろん、男らにティタのことがわかるわけもなく、ヒカリに助けを求めてもあたふたするだけで、抵抗しようがなかった。

「おそらく、”椿セナ”の手元に。使用している様子には見えませんでしたが。」

「……そうか。ならば”ＢＬＤ”から手に入れることにしよう。残りの行方の捜索は引き続き、わかり次第改めて考えようではないか。」

「はっ！」

「フフフ……。五大龍を我が手中に納めたとき、わたしは神に等しき力を手に入れることが出来る……。フフフ……ハーッハッハッ！！」

「デュエルで勝てない？」
「は、はい……。」

ヒカリが一人で寂しそうにしていた（宣告者たちがとりあえず騒いでつれてこられた）から夕飯を一緒にとることにした。
俺もタケルがデュエルしたくてしたくて仕方がなく、カケルとデュエルしていたので一人なわけで、悪くはなかった。

「だからトーカちゃんと違ってレッド寮何です。自信もないし……。」

でもデュエルのときの姿勢はよかった。決して弱いわけではなさそうだ。
……そうだな。俺もデッキの弱点を把握しているし、どうせなら一緒にデッキ構築から見直すか。

（わらわの出番じゃな！）
「お前は神出鬼没過ぎる！！タイミングを読め！！」
「え、えと……？何が……です？」
（ピギッ！！ピギッ、ピギッ！！）
（デッキ調整や戦術など一緒にしようと主人は言ったのじゃ。）
「……言ってはない。それで、いいかな？たぶん俺の部屋が一番広いし。」
「え、あ……、じゃ、じゃあ、お願いします！」
そうと決まったところで、夕飯を食べますか。カツ丼はあったかい方がうまい。
サラリーマンが昼に食べそうなものばっかりだが、卵はトロトロ、カツはジューシー。なかなかのものだ。

（わらわのもトロトロでジューシーじゃぞ♪）
「食事中にアホなこと抜かすな！」
「あの……。」
「なんだ、ヒカリ。」
「ティタさんって恋人……？」
（そうじゃ。主人はわらわのものじゃ！）
「んなわけあるか！馬鹿なこと言ってないでとっとと行くぞ！！」
「……そ、そうなんですか……。」
「あ、ヒカリ！？マジに信じるなよ……！違うからな！俺は誰とも付き合ってない！」
「……やっぱり意味わかってなかった……です……。」
（主人！おなごを泣かすとは、何事じゃ！）
「明らかお前のせいだろ！！」

ティタの暴走にヒカリが憂いて……。
少女（？）に囲まれるのはいいけど、疲れる！！元の世界に戻りたい……！！

って言ったって、受験前だったな。まぁまだこっちの方がマシか。
「えっ、あ、ま、待って下さい～～！！」

でもこの状況から逃げたいのは確かだが。

「ひ、広いです……。」
「しかもこれで一人部屋だ。」
（何かしようとしてもわらわが監視するであろう！呼ぶ人は先生で

よいかの？）
「する気ないし、というかお前の頭にはそういうことしかないのか？ってヒカリ、マジに考えるなよ。」
「えと……。わたしならセナさんに捧げても……。」
「だから！マジにするな！！」

たかがデッキ調整なのになんでこんなに疲労感があるのでしょうかね……。

（ピギッ？）
「あ、励ましてくれているのか……。」
「えと、（何故しないの？）だそうです。」
「何っ！？」
（キャウゥゥ……。）
「ああ！もういい！！勝手に調整始めてやる！！」

ティタの暴言に何故かヒカリが同調して憂えるか、恥ずかしがったり、ディリオンと宣告者はよくわかんないけど……。
とりあえず、調整が進まないことに変わりない！！！

（そういえば調整だったのう。何するのじゃ？まさかわらわを抜く気じゃあるまいな！）
「んなこたしないよ。ただ戦いのタイプを……ん？なんだ？？」

何かカードの束から光が出ているような……。

「……こ、これは……！！」
「「（……ブラックローズドラゴン！（？））」」
（ピギッ？）

第3話　うごめく影（後書き）

新制限でブラックローズドラゴンが無制限になった時期にこのラスト。

まぁ無制限は予期しませんでしたねｗｗｗ
書き始めから、こういう流れと決めていたので。

これ以降、セナがパワーツールを使うことはないでしょうｗｗｗ
スーペル植物が如何に詰まったら弱いか自身わかっていますので、
使わせたくなかったり……。

次話で敵登場！お楽しみに！！
では！

第４話　五大龍……！（前書き）

遅い上にだらけ感半端ない作品です。

もうどうしたらいいのか……。

それでは、始まります！！

第４話　五大龍……！

「とりあえず、完成かな。確かこんな感じでよかったよな。」
「……シンクロ召喚ってどういうのでした？」

ヒカリから聞いた話によると、シンクロについては流行こそしていないが、新たな召喚方法が出現したことを授業でやったらしい。
……ＧＸの後の世界でも少し違和感を感じるが……。

「チューナーと他のモンスターとのレベルを合わせてエクストラから召喚ってわけだ。ヒカリのデッキだとこれがチューナーかな。といってもシンクロしなくていい気がするけど。」
「そう、ですか……。」

とはいえ、俺のしらないカードがいくつかあった。まぁ使えるかは分からないけど、おそらくこの世界だけのカードがあるのだろう。

（早くデュエルやるのじゃ！待ちくたびれたのじゃ！！）
（ピギッ、ピギッピギッ！！）
（キャウゥゥ！キャウッ！）
「……なかなか、騒がしいですね。」
「……だな。ま、とりあえず始めるか。」
「はい！！」

この前も思ったけど、デュエルとなると目の色変わるなあ。いいことだとは思うけどさ。

チュン、チュンチュン……。

「ふわぁぁぁ……。朝か……。」

いつも朝は静かだ。何故というと、ティタが起きるのがとても遅いからである。さすが御姫様。

「……むにゅぅ……。」

「……あれ。」

「……あ、おはようですセナさん。」

「ひ、ヒカリ？何故ここに？？てかぱ、パジャマ……！？」

「……あ。そのまま寝ちゃいましたね。すみません。」

「……まぁいいか。とりあえず、着替えてくれ。」

とりあえず、記憶がないから何もしてはいない。大丈夫、パジャマ姿さえ見られなきゃ勘違いはないさ……。

（主人との卑猥な行為は神が許してもわらわは許さないのじゃ！！）

「えっ！？ひ、卑猥！？」

「何吹き込んでんだ！！」

（ピギッ！）

（ぎょえ！！！）

宣告者恐るべし……。

「のんびりしてるわけにもいかないしな。とっとと朝飯食って、授業行くか……。」

「はい、です。」

何となくこのままの生活がいいなあ、何て思う俺がいる。
どっちにしても戻る方法が無いんじゃあなあ……。

（キャウッ！キャウ、キャウ！）
「慰めてくれているのか。ありがとな。」
（キャウ！）
「あの、準備出来ました！」
「じゃ、行くか。」

流れに身を委ねてみるのも、悪くないか。

「今日こそ、デュエルだ！！セナ！」
「はいはい。昨日散々やっただろうに。」
「……俺、全敗って……。」

タケルにデュエルを挑まれた。カケルと夜通しでやったらしく、カケルは精神的にも身体的にもボロボロだった。

「あの～デュエルしたいんで退いていただきますか？」

デュエル場に誰かが立っていた。１人だから間違いなくデュエルする様子は無いが。

「退けだと……この戸幕カケオ様に向かっていう台詞か！退けとい

うなら俺様を倒してからいうんだな！！」
「……ねぇ、とばくかけおって何の人？」
「「……さぁ？」」
「ぐっ……！き、貴様らぁ～～！！」

どうやらやる気満々らしい。

「タケルとデュエルするまでデッキ見せたくないしなぁ……。」
「セナと同じく……。」
「な、何だよその目！！わかった、わかったから！変なのとデュエルすればいいんだろ！？」
「「わかればよろしい。」」
「ハモるなぁ！！」

と、いうわけでまずはカケルがどんなデュエルするかを見ることとなった。

「あ、よかった！まだ始まったません！！」
「……赤椿の騎士、デュエル場に立ってないわよ。」
「えっ！？終わっちゃいました……！？」
「……急に喜んだり落ち込んだり一体なんなの……。」
「うぅ……。こ、これは恋する乙女の試練なのです……。」
「……ほっとこ。」

「「デュエル！！」」
「俺様のターン！ドロー！モンスターとカードを1枚ずつ伏せてターンエンドだ！」

「あいつ、強気の癖に慎重だなぁ。」
「カケルなら、大丈夫さ。見てなって、セナ。あいつなら絶対勝つ！」

「俺のターン、ドロー！！まず、”ドラグニティ・アキュリス”を召喚！効果により手札の”ドラグニティ・ドゥクス”を召喚！”アキュリス”を”ドゥクス”に装備させる！バトル、”ドゥクス”で裏側守備モンスターを攻撃！！」
「ハッハッハー！”ダイスポッド”だ！！リバース効果お互いにサイコロをふり、出た目の大きい方が相手にダメージを与える！さぁいけ！サイコロ！！……3か。」
「げ！2……。」
「まだまだぁ！罠カード”リバースダイス”！！もう一度だぁ！……5！！」
「来たぁ！6！！」
「何ぃ！？」

カケオLP0

「……馬鹿だ……。」
「な、勝っただろ！さ、入ろうぜ！」
「く、くそっ！覚えてろ～～！！！」
あんな間抜けな負け方する奴忘れるのが難しい気がするんだが。

「あ、魔理明（まりあ）さん、始めるみたいですよ！！」
「……よかったわね。」

「俺の先攻で行くぜ！！ドロー、切り込み隊長を召喚、効果でもう1体だぁ！！ターンエンド！！」

切り込みロック……！しまった。除去がたぶんない……。

「ドロー！……モンスターとカードを1枚ずつ伏せてターンエンド。」

……これはちょっとヤバいな。
ひたすら攻撃力上げられたら俺は勝てないだろうし。ヤバいな～。

「俺のターン！手札から”連合軍”を発動！効果によって俺のフィールド上の戦士族モンスターは攻撃力４００アップする！バトル！！”切り込み隊長”で裏側守備モンスターを攻撃！！」
「ぐっ……。”キラートマト”の効果だ。デッキから”プチトマボ

ー”を攻撃表示で召喚！」
「なら、もう一体の”切り込み隊長”で攻撃だ！」

セナＬＰ３１００

「ぐっ……。”プチトマボー”の効果だ。デッキから”プチトマボー”と”トマボー”を守備表示で召喚……。」
「また何か出やがったなあ……。ターンエンドだぜ。」

まずは”切り込み隊長”の牙城を崩す！！
「俺のターン、ドロー！！手札から”薔薇の刻印”を発動！！墓地の”プチトマボー”を除外して”切り込み隊長”のコントロールを頂くぜ！そして”おろかな埋葬”！！デッキからディリオン……”ダンディライオン”を墓地に送る！！効果によってトークンを２体特殊召喚！！」
（キャウッ！！！）
「そして、シンクロ！！”プチトマボー””切り込み隊長””綿毛トークン”をチューニング！！いでよ、”スプレンディッドローズ”！！」
両手に茨の鞭をもつ、人方のモンスターが現われた。

「効果発動だ！墓地の”キラートマト”を除外して”切り込み隊長”の攻撃力を半分に！”トマボー”を攻撃表示にしてバトル！！”トマボー”で”切り込み隊長”に攻撃！！」
「どわぁ！」

タケルＬＰ３３００

「”スプレンテッドローズ”でダイレクトアタック！！」
「ぐわぁぁ！！」

タケルＬＰ１１００

「そして”スプレンテッドローズ”の効果発動だ。墓地の”プチトマボー”を除外することで自身の攻撃力を半分にし、もう一度攻撃することが出来る！！」

「えっ、えぇ～～！！！」

「なんか呆気ないな。”スプレンテッドローズ”でとどめだぁ！！」

「のわぁぁ！！！！」

タケルＬＰ０

（わ、わらわの出番が……！！）

「……いやはや、いろいろ試したかったんだけどなあ。」

”ブラックローズドラゴン”。まぁいろいろキーカードすら来なかったし、ＬＰ８０００じゃあないし、仕方ないか。

「もう一回！！次！早く！！」

「やりたいのも山々だけどお客いる前で何度も戦いたくないしねぇ～～？」

と、いいながらヒカリ達の方をみる。

「えっあ、あの……！」

「ちっ、バレてたか。まぁいいわ。”赤椿の騎士”、いや椿セナだっけね。私とデュエルしなさい……！」

「いいけど……。そういえば名前は？」

「紹介がまだだったわね。西園路魔理明（さいおんじ まりあ）よ。」

「マリアか。よろしく！」
（主人、気をつけるのじゃ……。）
突然ティタが強張った表情になった。
（……なんでだ？）
（嫌な予感がするのじゃ……。あの女から、禍々しいものを感じるのじゃ。）
（……わかった。）
「デュエルの前に、あなた、どうやって五大龍を？」
「へっ？」
「あるんでしょ？”ブラックローズドラゴン”があなたの手元に……。」
な……。
「……さあね。じゃあ始めようか。」
なんでヒカリ以外にしらないことを……！？
それだけじゃない。五大龍って……。
いろいろ聞きたいことが出来たな。とりあえずティタの言う通り、慎重に……！！

第４話　五大龍……！（後書き）

次回からオリカの登場ですかね。
予定よりだいぶ早いです。まぁコラボのために……。

またまたテストがあるので更新は遅いですが、暖かく見守って欲しいです！

それでは！！

第5話　マリア様の正体（前書き）

だいぶ遅くなりました！！

悠さんの作品とコラボさせていただく関係でオリカを予定より早めに出しましたｗｗｗ

問題はネタが尽きないかどうか……。

それでは、どうぞ！！

第5話　マリア様の正体

「情報アドバンテージ分先攻後攻を選ばせてあげるわ。」
「それだけじゃあ埋まらん気もするが……。ま、いいか。先攻もらうぜ、ドロー！」

さっきのデュエルで出なかったカード達がきたな。そこでの情報アドバンテージになってない。

「俺は1枚モンスターを伏せて、カードも1枚伏せてターンエンドだ。」
「そう。じゃあ行くわよ。わたしのターン。ドロー！まずは”占い師の魔法”を発動するわ。2枚ドローして、手札の魔法使いモンスターを墓地に送るわ。」

”占い師の魔法”！？
やっぱりいくつか俺の世界にはないカードがあるのか……。

「”クルセイダーオブエンディミオン”を攻撃表示で召喚、バトル！！”クルセイダーオブエンディミオン”で伏せモンスターを攻撃するわ！！」
「……”プラントシード”だ！リバース効果発動！！デッキから守備力500以下のモンスターをセットする！！来い、ディリオン！！」
（キャウッ！！）
「そう。じゃあ速攻魔法”再度魔法”を発動するわ。フィールド場の魔法使い族モンスター1体を選び、そのモンスターはもう一度攻撃することが出来る！行きなさい！”クルセイダーオブエンディミオン”！！」

（キャウゥゥ！！）
「くっ……。”ダンディライオン”の効果発動だ。フィールド場に綿毛トークンを2体特殊召喚する。」
まぁこれで役者は揃った……！！
「カードを1枚伏せてターンエンドするわ。」
”クルセイダーオブエンディミオン””再度魔法””占い師の魔法”とくると魔法使い、おそらく魔力カウンターデッキだ。となると、”魔導戦士ブレイカー”も入っているはず。あの伏せカードも”ディメンションマジック”の可能性だって……。
「俺のターン、ドロー……！」
とりあえず、受けてばっかじゃあ勝てる訳ない！！
「まず手札から”発芽する新芽”を発動！！デッキからレベル2以下の植物族モンスターをセットする！セットするのは”グローアップバブル”！」
場には3体、手札4枚。十分だ！
「綿毛トークンと伏せモンスターをリリースして行くぞ！ティタ！！」
（……もしやそなたの手札に……。）
「ええ。速攻魔法”ディメンションマジック”を発動！”クルセイダーオブエンディミオン”をリリースして”ブリザードプリンセス”を特殊召喚！！」
（フフフ。久しぶりね、椿姫。）

（やはり……。氷姫か……。）
「知り合い……？それより、あいつも！」
（どうやらこの決闘、負けられないようじゃな。主人。）
（まぁ今更この世界に来るとわね～～。まぁいいわ、行きましょ、マリア。）
「そうね。”ディメンションマジック”の効果により、”椿姫ティタニアル”を破壊するわ！！」
「”椿姫ティタニアル”の効果だ。綿毛トークンをリリースして破壊効果を無効にする。」

とはいえ、雪姫とかいう”ブリザードプリンセス”の攻撃力は２８００。ティタの攻撃力も２８００だから……。

（相打ちじゃ。わらわは簡単に戻ってこれるのじゃ……。）
「あいにく、そういう構築じゃないからな。たぶんお互い戻ってくる時間は五分五分だろう……。」

それより、攻撃力が上昇するものを使われる可能性がある。
……どうすんだよ……。

「……1枚伏せてターンエンドだ。」
「そう。わたしのターン……。”魔導戦士ブレイカー”を召喚するわ。効果によってカウンターを乗せ、外して発動！！さっき伏せたカードを破壊するわ！！」
「く……。”棘の壁”が……。」
「そして永続魔法”マジシャンズリンク”！！フィールド場の魔法使い族モンスターの数×２００の攻撃力をあげるわ！！」
「何っ！？」
「これで雪姫は３２００、ブレイカーは２０００！！バトルするわ！！」

くそっ！ヤバい……！！！

「雪姫で”椿姫ティタニアル”を攻撃よ！！」

（はぁ～～！食らいなさい！！）

（ぬぐぅ……！！）

「ぐぁぁ！！」

セナＬＰ３６００

「まだよ！！”魔導戦士ブレイカー”でダイレクトアタック！！」

「うわぁぁ！！」

セナＬＰ１６００

「フフッ。ターンエンドするわ、セナ。」

「こりゃあいつじゃあ勝てんわな……。俺のターン……！！」

１６００……。まだ１６００あるんだ！！まだまだ逆転のチャンスはある。それに負けたら聞きたいことも聞けない……！

「ドロー……！！……モンスターを1体セットだ。」

「フフッ……もうギブアップかしら？わたしのターン！ドロー！！」

諦めない……最後の最後までは諦めない！

「”熟練の黒魔導師”を召喚！！バトル！”魔導戦士ブレイカー”で攻撃！！」

「”プチトマボー”だ！！効果によって”プチトマボー”２体を特殊召喚する！！」

「粘るわね……。”熟練の黒魔導師”と”ブリザードプリンセス”で”プチトマボー”を殲滅よ！！」
（雑魚風情がのこのこ出て来るんじゃないわよ！！）
「……”トマボー”を特殊召喚。」
「メインフェイズ2に魔法カード”デストラクションマジック”を発動！フィールド場の魔法使い族、”魔導戦士ブレイカー”を墓地に送って”トマボー”を破壊するわ！ターンエンド。」
「……くっ……。俺のターン……。」

まさかプチトマボー達が1ターンも持たないとわね……。LPもあまりない。相手はまだノーダメ。他に手があるわけでも……。

（ドローするのじゃ……！）
「えっ？」
（ドローするのじゃ！勝ちを信じて、ドローするのじゃ！！）
「……。」
（まだわらわは戦えるのじゃ。だから……、だから諦めるのはまだ早いのじゃ！！）
「……ティタ……。」
（わらわは死んでも氷姫に負けたくないのじゃ。でも主人が気持ちで負けていたら勝てないのじゃ……！勝ちを信じてドローするのじゃ！！）
「……そうだな。ティタのいう通りだな。」

相手の手札はない。”あいつ”が使えれば状況は一変するんだ！！

「俺は……！勝つんだ！ドロー！！」

「あいつならやってくれるさ。あっという間に俺と決着つけられたんだし、やってくれなきゃ俺に勝った意味ないだろ。」
「アニキ、意味不明だぜ？」
「セナさん……！頑張って！！」

まだだ……！！

「更に”植物の宝札”を発動！！手札の”ローンファイヤーブロッサム”を除外して２枚ドロー！！」

……来た！！

「手札から”テブリドラゴン”を召喚！！効果発動して墓地から”ダンディライオン”を特殊召喚！！そのままシンクロ！！」
「レベル７……、まさか！！」
「黒薔薇の龍よ！漆紅の翼ですべてを薙払え！！シンクロ召喚！！」

すべて無に返す……！！

「”ブラックローズ・ドラゴン”！！！！」
「来たわね……！！」
「効果により、フィールド場のカードをすべて破壊する！！”ブラックローズデストラクション”！！」
「な、全体破壊……！？」
（きゃあああ！！）
「雪姫っ！！」

「そして俺は墓地にいった”ダンディライオン”の効果によってトークンを特殊召喚！」
（キャウッ！！）
「ターンエンドだ。」
「……やってくれるわね。わたしのターン。ドロー……。」
そう。今相手はＬＰ４０００であることは変わらない。しかし、手札はドローするしかないんだ……！！
「……ターンエンドするわ。」
だから……、俺はこいつに賭ける！！
「俺のターン、ドロー！！」
さぁ、ティタ。お前の真の姿、見せてやれ！！！
「俺は墓地にいる”椿姫ティタニアル””プラントシード””プチトマボー””トマボー””グローアップバブル”を除外し……。」
「……？」
「いでよ、椿の姫よ！”朱椿の姫ティタニアル”！！」
（氷姫よ……。今宵はわらわの真の力を見せてやろう……。その目にしっかり焼き付けるがよい！！）
「こいつは除外された植物族モンスター×４００の攻撃力、守備力になる！！」
「……つまり初期攻撃力は２０００。とどめにはまだまだ足りないんじゃなくて？」
「俺は”植物の宝札”のときに”ローンファイヤーブロッサム”を除外している。つまり攻撃力は２４００！！バトル！！」

これで終わりじゃないが……！！

「プレイヤーにダイレクトアタック！！」

「……きゃああ！」

マリアＬＰ１６００

「手札より、”おろかな埋葬”を発動。”ダークヴァージャー”を墓地に送る、ターンエンド！」

もし精霊遣いならこのティタニアルをすぐに破壊するはず……。魔法も罠も伏せてないから容易いだろ…！

「わたしのターン……！！……出てきなさい！”魔導師セレナ”を守備表示で特殊召喚！ターンエンドよ……！」

「”魔導師セレナ”……？」

盾か……？

「それでもけりをつける……！！俺のターン、ドロー！俺は”カメィラ・エンジェル”を召喚！そして墓地にいる”ダークヴァージャー”の効果により特殊召喚！！シンクロだ！！」

「レベル２を２体……？」

「ここで”カメィラ・エンジェル”の効果発動！！植物族モンスターとシンクロするときレベル４になることができる！！！」

「レベル……６！？」

「一輪の薔薇よ！可憐に舞え！！シンクロ召喚、”スプレンディッドローズ”！！」

これで最後だ……！

「”スプレンディッドローズ”で”魔導師セレナ”に攻撃！！”スプレンディッドローズ”の効果で”ダークヴァージャー”を除外し、攻撃力を半分にしてもう一度攻撃することができる！！ダイレクト！！！！」

「……”魔導師セレナ”の効果よ！もう一度特殊召喚……。」

「なら続行……！！」

「……くっ……。」

「そして”朱椿の姫ティタニアル”でダイレクトアタック！！」

攻撃力は……２８００！！

「（レッドカメィラ・ブリザード！！）」

もちろん……通る！！

「きゃああ……！？」

マリアＬＰ０

（わらわの勝ちじゃな。氷姫よ……。）

（……まさか椿姫に負けるとはね。椿姫というより黒薔薇の龍かしら？）

（……っ！！それでも勝ちは勝ちじゃ！！）

ティタの精霊界の人間関係（精霊関係か）がかなり気になるな。なんか面白そうだ。この我儘なお姫様が話すはずないと思うが。

「見事だったわ……。まさか負けるとは想像もしてなかった。それなりに資格はあるようね。」
「資格……？」
「これは預けておくわ。私が持つよりも貴方が持つ方が幸せだと思うわ。」
「これは……。」
「ただ……気をつけなさいね。誰かが……。いや、今更か。貴方なら大丈夫そう。」
「……何のことだ？」
「フフッ。こっちの話。」
お嬢様はどこもマイペースなのか……！？

（……先ほどの殺気は氷姫のものか？）
（殺気……？私は出したつもりないわよ。まぁ椿姫がいるとわかったときは出したかもね～～。）
（……？そうか……。）
「そういや殺気がどうのこうのいってたっけな。今はどうなんだ？」
（感じないのじゃ。）

即座に、ハッキリ、キッパリとした答えにある意味驚いた。
しかし嫌な感じはしたんだけど……。

「セナさん、すごかったです！！まさか、まさか勝っちゃうなんて……！」
「セナ！！次、やるぞ！！俺はセナに勝てなきゃ気がすまない！！」
「今日はもうやらん！！ってかヒカリ、ひっつき過ぎだ。」
「あぁ、ぅ……。」

「これは進展するまで長そうね。」
（ウブって怖いわ〜〜。）
（全くじゃ。）

正直、今なんでこいつに呼び出されたかはわからない。
ただ俺自身聞きたいことがあったし、おそらくそれについてとは踏んでいる。

「ただなんで夜の海岸なんだ??」
「え? ムード満点だと思わない??夜の海岸で男一人と女二人……!」
「えっ、あっ、ま、マリアさん!?」
「フフッ。冗談よ。」
「あんたが言うと冗談に聞こえねぇ……。」
（全くじゃ。）
「それはいいとして、わたしは門限があるから早めに済ましたい。率直に説明するわね。」

そいやブルー寮って門限あるんだっけ?
あれ、あったかなあ……。

「とりあえずはさっきあげたカードなんだけど……。」
「”星屑龍”か……。本当に俺がもらってよかったのか?」
「私、持っていても使わないし、”デブリドラゴン”使ってるあなたなら機能するでしょう……?」

「……、いいのか？」
「ええ。わたしの言う事聞いてくれるのならね。」
「言う事……？」
「ヒカリにも言ったけど、五大龍って言うのはわかるわね？」
「……”ブラックローズドラゴン”とかか。」

おそらく、俺の世界にもあるあれだろう。５Ｄｓの世界だとシグナーが使う龍たちだが、その前の世界に既にあったんだな。

「そのカードを狙う連中がいるの。わたしはその連中がどういう目的とか誰かも知らないけど、五大龍を狙っているのは確実よ。……ここに来る前、何度殺されかけたか。」「……なぁ、”黒薔薇龍”って以前誰か持ってたりしてたのか？」
「誰かからもらっていたらその人よ。あなたの場合は違うと思うけど。」
「……なんでそう思ったんだ？」
「あなたならそうかなあってね。」
「……鞄の中にありましたよね？」
「もらった記憶はない。」
（そちは精霊が見える人間の中でも選ばれた特異の人間が所持していると思ったんじゃな。）
「ええ。そのとおりよ。だから奴等は奪いに来るの。」
「……奪われたのは？」
「わからないわ。奪われてないのは”スターダストドラゴン””ブラックローズドラゴン””エンシェントフェアリードラゴン”。」
「あ、あの時には見せてませんでしたがわたしが持ってます。」
「だから、わたしに代わってちゃんと守りなさいね！」
「え、あ……。うん。ってかマリアって何もんなんだ？」
「……わたしは、ただのお嬢様よ♪」
「はぁ！？」

夜の密会は意外な真実を明かして幕を閉じたのだった。

第5話　マリア様の正体（後書き）

ここから戦いと言うか何と言うか……。
しばらくデュエルは休みですかね。

オリカの紹介をやろうと思います。

キャラ紹介もやらなきゃ……。

多忙なので更新が2ヶ月以上かかると思いますが見ていただけたらありがたいです……

それでは、また次回！！

第6話　テストです。（前書き）

だいぶお久しぶりです！！
山下和男改め、愁彩です！！

2か月くらいの休載といいつつも半年近くでしょうか……。本当にすみません！！
ようやくPCからの投稿です！執筆のスピードが上がればいいなぁ……。

今回はほのぼのとした話です。デュエルなし。
それでは、どうぞ！

第6話　テストです。

そう、前回はデッキ調整ということで結局朝までいた（寝てしまったから）から今ここにいるのはわかる。がしかし……。

「なんで今ヒカリがいるんだ……？」

「えっと、ちょ、朝食まだですよね……？」

『キャウ！キャウゥ！！』

「そうですか…。そうですよね……！」

ディリオンと会話、出来るのか……って感心している場合じゃない！！

「朝食を食べる食べない関係なしに言いたいことがあるんだ、ヒカリ……。」

「はい？」

「何故、貴女は、この時間帯に、ワタクシノヘヤニイルノ？？？」

そう、この部屋には鍵がしっかりかかっている。昨夜かけ忘れたはずはないはずなんだ。だからこの部屋にヒカリがいるということがありえないことに等しいわけで……。

『主人は自分にミスはないといいたいのじゃな。鍵はかけておったし、開けた形跡もないのじゃ。』

「あ、え、えっと……。その、マリアちゃんに、合鍵を……。」

「合鍵ぃ！？」

『ピギッ！？』

思わず大きな声が出てしまったようだ。宣告者（デクレアラー）たちが驚いてしまっ

たようだ。たぶんだけど。

「悪い……。というより、なんであいつが合鍵をもってるんだ??」
「えと、クロノス先生を買収したからとかなんとか……。」
「ば、買収……。どこのお嬢様だよあいつ……。」
「たしか、西園寺グループのご子息だったような……。」
「本当にお嬢様かよ!?」

あの夜になんかそんなこと言っていたようななかったような……。というより、教師を買収って前代未聞だろ。あの万丈目サンダーですらやっていないことなのに何も気にせず（気にしたのかもしれないが）やっちゃったよ。どんな学園の小説とか漫画でも流石に教師買収する金持ちなんて……いたような……。

「えと、朝食できました。」
「あぁ。ありがとう。ちょっと着替えるから待ってろ。」
「はい。わかりました。」

こうしているとなんか夫婦っぽいようなないような。夫婦といえば両親は元気だろうか。こっちの世界に来てから元の世界を気にしていなかったけど、向こうの世界ではどうなっているのだろうか。あいつのように行方不明扱いにされているのであろうか……。

「……セナ、さん?」
「ん?あ、なんだ??」
『卑猥なこと考えてたのじゃ。最低なのじゃ!!』
「ば、何言ってんだよお前!別にそんなこと全然考えてないし、ヒカリが勘違いしたらどうすんだよ!!」
「ひわい……ってなんですか??」
『それはじゃの〜〜。ゴニョゴニョ……。』

「ひゃ、ひゃぅぅ！！」
「ちょ、馬鹿姫！何言ってんだよ！！」
『わらわは何もってないのじゃ♪』
「わわわ！わたしは、その、べべべつにかまかまいませんけど！！せ、セナさんがそのきなら！！！！！」
「ヒカリ！落ち着いてくれ！お願いだから落ち着いてくれぇ！！」
『実はそういってもらえてうれしいんじゃろ？』
「馬鹿姫はあおるな！！」
「き、期待してない、ですか……。」
「そんなんじゃないって！！」
『ぴぎっ！ぴぎぴぎっ！！』
「痛い！痛いって！！おい馬鹿姫！なんとかしやがれ！！」
『やじゃ。』
「そうなん、ですか……。」
「あーー！！もう！！マリア張り倒す！！！」

そんなこんなで騒ぎつつも朝食が済んだ。カケルやタケルが来る前に部屋を出ないと何言われるかわからないし、事態は悪化する一方な気がしたのでさっさとヒカリと一緒に登校することにした。こういう事態になるとは想定もしなかったので対処に非常に困ったが、とりあえずのところは、ヒカリとティタたち、つまり精霊たちしか見ていないし、おそらく、聞いていないだろうからとりあえずは大丈夫だろうとおもう。

『そう考えていてもにやけておるぞ、主人よ。』
「だから心読むなっての。読んでもいいが口に出すなよ。」

「でも少しだけにやついてますよ？」
「……まぁ、あんなに楽しいのは本当に久々かもしれないからな。」
元の世界だったら俺は受験生。それも大学受験を受ける身だからデュエルとか楽しんでいる場合ではなくて、勉強に集中すべきなのだ。原因はわからないがこうして異世界にいるということにより、久々に勉強というものから解放されて日々の生活を楽しんでいるのであろう。誰かわからないが、お礼を言いたい。この世界で楽しい日々を送れることはその人のおかげなのだろうから。

「なんか、うれしいです。」
「ん？なにが？？」
「セナさんが、一緒にいて楽しいっていってくれるとなんか、うれしいです。」
「……そうか。」
「初めて見たとき、かっこいいって思ったんです。敵を圧倒するデュエル、そして楽しんでる姿がとても……。自分じゃ到底届かないところかなって。でも、こうして話したり、朝食を一緒したり、なんか不思議です。あの場所にいる人がここにいるのが。そして同じ人間で同じ息を吸って、同じ場所で生活している。でもそれがわかったというのがすごくうれしいんです。」
「俺は特に何もしてないんだがな……。」
「何もしてなくても、いろいろ影響は受けてるんですよ？？」
うれしい、か……。どんな影響を与えられたかはわからない。でも、彼女は彼女なりのいい方向に向かっているのだろうと俺は思う。出会ったころよりも少し、いやそれ以上に心が強くっているような印象を受けた。
そうこうしているうちに、アカデミアの正門まで来ていた。

「あ、マリアちゃん。おはようございます！」
「あら、ヒカリに騎士（ナイト）じゃない。」
「ナイトはよしてくれよ……。セナって名前があるんだからさ……。」
「二人一緒に登校ってことは……。うまくいったのかしら？」
「えっ、ま、マリアちゃんのおかげでなんとか……。」
「あ、マリア！てめぇ勝手に合鍵とかないだろふつう！！」
「だってクロノス先生が売ってくれたのよ！」
「……ふつうの先生だったら売らないだろ……。」
呆れながらも、いつの間にか怒ることやめた。まぁ常識が通用しなさそうだし。

（氷姫よ、わらわの主人がそなたのよりも常識があると思っているのじゃが？）
「だから心読むなって！！」
（あら、心外。ってわけでもないんだけどね～。）
「誰のこと言っているのかしら、雪姫（ゆき）？」
「お嬢様らしいししょうがないとは思うけどさ……。」
「貴方だって常識人とは思い難いけど？」
「一般庶民だよ！どっからどうみても！！」
「あ、あの～～。」
「「ちょっとヒカリは黙ってて（なさい）！！」」
「ひゃぅ！」

といいつつもそろそろやめたほうがいいだろう。騒ぎになりつつある。む、向こうにいるのはタケルたちか……。
「ま、ヒカリがいうなら引いてやるか。常識として引くべきだろう

しな。」
「あら、貴方に引く気がなくても私が先に引いてたけど？」
（ピギッ…。ピギピギッ……。）
「はぁ、精霊が精霊なら主人も主人、ですか……。」
「「何かいった！？」」
「ひゃぅ！？な、なんでもない……です……。」

朝に騒ぎがあって、登校に騒ぎがあって……。本当に今日は疲れる一日だな。楽しいからいいけどさ。

「浮かれているようだけどさ、セナ。」
「ん？なんだ、タケル。」
「今日、テストらしいぜ。」
「へぇ～。テスト……。」

テストか……。そういえば周りがなんとなくピリピリしている感じがする。それはそのためなのか。
とりあえずここの世界での年齢は齢１６歳。現実だったら齢１８歳だったから、ある程度のテストだったら平均点くらいは狙える。受験生でできなかったら正直恥ずかしいしな。しかもこの世界だ。おそらく数学とか歴史とかじゃなくて、遊戯王に関するテストであろう。どこかの２次創作小説では筆記と実技だったな。ＴＦでもそんな感じだった気がする。

「……余裕そうっすね。」
「まぁな。なんだかイケそうな気がするんよ。カケル。」
「後でアニキみたく痛い目みてもしらないっすよ？」
「タケルじゃないから安心しろ。」
（キャゥ！）

……問題はテスト中にディリオンが騒がないかどうかってところだろうな。周りを気にしなければ何とかなるだろうけど。

「落ち着いててくれよ……。」

（キャウキャウ！）

「何の話っすか??」

「いや、気にすんな。おっと、天上院先生が来たようだぜ。」

「みんな、席ついて。テスト始めるわよ。」

さて、どうなることやら……。

「ふぃ～。終わった終わった！」

「いいお目覚めのようだな、タケル。」

「いぃ！?寝てたのわかったのか！?」

「そりゃあな。開始5分くらいで寝てただろ。」

「時間まで……。」

しかもいびきまでしてたしな。よく聞こえた。天上院先生がずっと睨んでいたのにもかかわらず寝れる神経ってすごいと思うんだが。

「うぅ……。」

「ん?どうした、カケル。」

「全然できなかったっす……。もう終わりっすよ……。」

絶望に満ちた顔をしている。つかそんなに難しくないだろう。

「おまえなぁ……。まだ筆記だけなんだから大丈夫だろ。筆記５０点の実技５０点なんだろ？実技で取り返せばいいじゃないか。」
「そうだ、カケル！！筆記で０点でも実技で５０点取れれば５０点だ！！」
「それってだいぶ低いっすよ……。」

確かにな。

「それじゃぁ、実技の方に移るわ。デュエル場に移動して頂戴。」
「「「「は～～い。」」」」

それはここは小学校か！？ってツッコミたくなるほどの純粋な返事だった。

第6話　テストです。（後書き）

次回は実技ということになります。
相手はどんなデッキにしようかな？
植物の大の苦手はライロなんですが出す気にはなれませんね。墓地の計算もしなきゃいけないし面倒ですｗｗ

オリカの掲載もしなくてはいけませんね！うわ、さぼってたからこんなことになるんだぁ！！
といっても学年末、しかも進級がかかっているテストがあるのでまた少し期間があくと思います。

テストが終わったらいろいろ活動したいと思っています。
完全オリジナルの小説を進めなくてはいけませんし、生実況をニコ動でやるつもりですし。歌ってみたもあげたいですし。
春休み部活もありますが勉強と部活と趣味と遊びをバランスよくこなしていきたいと思いますね。

それではまた次回！！

第7話　盲点（前書き）

こんにちわ。

今回の大震災での直接の被害はありませんでしたが、静岡県東部地震により、自室のものが多少崩れ、復旧に時間がかかりました。
命には別状はありません。
また、計画停電につき、ＰＣを使用できない日が続くと予想しています。
更新速度がまた遅くなるかもしれません。

それでは、第7話おたのしみください。

第7話　盲点

天上院先生の案内の元、デュエル場に来た。

「つか一人一人のデュエルを観戦するんだな、ここ。」

「その方が面白くないか??」

「たしかにタケル的にはそうだろうけど……。」

俺のデッキみたいなやつだと公開してデュエルすると対策とられやすかったりするんだよな。次元使われたら終わりだし、オジャマとか地盤沈下で場を埋められたらお終いだし。

「で、実技って誰と戦うんだ??」

「ランダムっすよ。ただし男女は別っす。」

つまりヒカリとマリアと戦う心配はないというわけだな。

（つまらんのう。氷姫をいたぶれないなんてつまらないのう……。）

「……いたぶるほどやってないだろうが。」

まったく。雪姫との関係を話してはくれないからどうなのかわからないけど因縁があるっぽいのは確か。ただそれを俺のデュエルの方までに影響を出さないでほしいんだけどなぁ……。精霊の力って怖い怖い。現実でも多々あった初手《椿姫ティタニアル》がこっちに来てから結構な頻度に上がってるっていうね。《ローンファイア・ブロッサム》から特殊召喚させたいんだってば。あんたは。

（早く場に出たいのじゃ！）

「だからそう思うならデッキにいろって……。」
（そもそもわらわの家臣がいないからそうなるのじゃ！！）
「家臣……？」
（そうじゃ！《椿の騎士団》じゃ！！）
……《椿の騎士団》。聞いたことがないな。つまりこの世界のオリジナルカード。椿ってつくくらいだからかなりティタ自身とシナジー性は高いのであろう。
「しかしそんなカードどこで手に入れるんだ？購買のパックで売ってるわけなかろうに。」
（精霊界じゃ。）
精霊界……か。なんとなくその言葉が出てくるような気がしたんだが……。
そもそもどうやっていくのだろうか。俺には転移の力なんてあるわけがない。それだけはどうしようもないわけで。
「まぁ、今は無くても十分だろうな。こっちにきてあまり負けてないわけだし。」
（油断は禁物じゃ。そなたに実力があっても負けることはあるのじゃ。油断してはならぬ。どこのだれであってもじゃ。）
「……珍しくいいこと言うな。」
ふと何か冷ややかな視線が……。
「……なん、だ？」
「誰とはなしてるんだ、お前……。」
「いや、えと、あのその……。」
「独り言っすか？それにしてはちょっと……。」

「えっと、あの……。」
「まぁなんというか、変わったやつだな！」
「……はぁ。」

もう、いいや……。ヒカリたちといるのに慣れすぎてこいつら見えてないっていうのをわすれていたよ、完全に。あぁ、もう変な人だと思われてるよ確実に……。
それよりも、見ている限りでは寮別で闘うわけではなさそうだ。つまり、レッド寮にいる俺でもブルー寮の奴と闘えるわけだ。ダイスポッドで自滅したあいつとは限りなく当たりたくない……。

「ふはははは……！！1ターンＫＩＬＬ！！これがお前らレッド寮と俺様の実力差よ！！」
「く、くそ……。」

あ、あいつは……。ダイスポッドバーンのバカ……。

「俺様のダイスコントロールに狂いはない！！」
「「わーーーー！」」

そんなにすごいのか！？あれってそんなにすごいのか！？

「1ターンＫＩＬＬかよ、すげぇな。」
「アニキ、あいつどこかで見たことないっすか？」

こいつらも大概変だよ……。

……。こんなもんかなぁ。どう思うティタ。

（わらわメインじゃったら別に構わんのじゃ。）
（キャウッ？）

ディリオンはフル活用させてもらうよ。あとティタはちゃんとデッキにいろよ。でないと出番が遅くなるからな。いつも通りこうやってこうしてだすつもりだから。なんとなくだが初手にこいつがくる気がするんだ。だからデッキにいてくれよ……。頼むから……！！

（出すなら問題ないのじゃ。さて、主人、ディリオン、出陣じゃ！！）
（キャウッ！）
「しゃあ！行くか！！」

「ふん、貴様か……。《赤椿の騎士》（レッドカメリア・ナイト）は……。」
「まぁ……。あってねぇっておもうんだけどな。周りが勝手にそういい始めたからあんま気に入ってはいないんだが。」
「いや、名に恥じぬいい目をしている……。しかし、それとこれとは別だ。今から貴様は俺が葬る……！」
「葬る……？死ぬ気はないぜ？」
「……決闘者たる者、死ぬ気で闘い、勝敗を決することをしろ。負けとはすなわち死となるときもある。」
「……。」
「覚悟はいいか……。」
「あぁ……。」
「「決闘（デュエル）！！」」
「先攻もらうぜ、俺のターン、ドロー！！」

長引かせる戦いは好きじゃない。とっとと展開して勝負にでるぜ……！！

「手札から《発芽する新芽》を発動！デッキから《スポーア》をセット！そして手札より永続魔法《超栄養太陽》を発動！！《スポーア》をリリースしてデッキから《ローンファイア・ブロッサム》を特殊召喚、そして効果発動！自身をリリースしてデッキから《椿姫ティタニアル》を特殊召喚する！！」

（わらわの出番かのう……。）

「そして一枚セットしてターンエンド！！」

ＬＰが４０００のデュエルにおいて序盤で高打点のモンスターを出すことは大きい。それに１ターンで早々高打点なんて出ないだろうしな。

「《椿姫ティタニアル》……。序盤からとばしてくるか……。俺のターン、ドロー！！」

さて、どんなデッキか……。

「《カードガンナー》を召喚！効果発動、デッキから3枚までの任意の数を墓地へ送り、攻撃力をその数×５００アップさせる……！」

カードガンナー　攻　４００→１９００

「そしてカードを1枚セットしてターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロー！」

様子見か？どちらにしろ好都合！！

「バトルフェイズ！！《椿姫ティタニアル》で《カードガンナー》

に攻撃！！《カメリア・リーフ・カッター》！！」
（我が華麗なる斬撃、喰らうがよい！！）
「罠発動、《ガード・ブロック》！俺はこの戦闘でのダメージを０にし、カードを１枚ドローする、そして《カードガンナー》の効果により、もう１枚ドロー！！」
「……メインフェイズ２、俺はカードを１枚セットしてターンエンドだ。」

ボードアドバンテージは明らかにこっちだが、相手は手札６枚。実質消費してないに等しい
。それに墓地になにか３枚を送っている。そもそも何を狙っているかがわからない……。

「……。主に魔法を使い特殊召喚し、《ローンファイア・ブロッサム》を軸に展開していく。それがお前のそのデッキ。違うか？」
「えっ……？」
「《赤椿の騎士》と言われていた。てっきりお前はその通りの《赤椿の騎士》とやなんやのカードを使ってくると思っていた。戦ったところを見たことはない、まるで未知の敵と戦うような気分で臨んだのだか……。」
「……。」
「《植物》デッキのままじゃあ俺に勝てん。種族メインの限り、お前は俺に勝てんよ……！！」
「……やってみなくちゃわからない。」
「ならやってみせよ！俺のターン、ドロー！！俺は手札から《死神の使者》の効果を発動！！」
「《死神の使者》（アンデット・エメサリー）……！？」
「このカードを墓地に送ることにやりデッキから《アンデット・ワールド》を手札に加えることができる！！そして効果発動！！」

《アンデット・ワールド》……！！まさか、こいつのデッキはアンデット……。

「手札より《死者の復活》（リズレクション・デッド）を発動、墓地からアンデット族のモンスターを特殊召喚する！出てこい、《カードガンナー》！！そして効果により３枚墓地へ……。」

墓地にモンスターを送り、専用のカードで墓地からフィールドへ。アンデット族っていう制限も《アンデット・ワールド》によって解消される……。

そう、そしてそれは……。

「《馬頭鬼》の効果発動、こいつを除外して墓地から《死神の龍アンデットドラゴン》を特殊召喚する！！こいつは墓地に存在するアンデット族モンスターの数×１００攻撃力がアップする！！」

合計モンスター数　４枚

死神の龍　アンデットドラゴン　２５００→２９００

「バトル！！《死神の龍　アンデットドラゴン》で《椿姫ティタニアル》に攻撃！！《死に導く破壊光線》（デス・ブラスト）！！」

（ぐをぉぉぉ！）

セナＬＰ３９００

「ぐっ！」

「《カードガンナー》でダイレクト！！」

セナＬＰ２０００

「ぐあぁぁぁぁぁ！！」
「……ターンエンドだ。」
「俺のターン、ドロー……。」

《増草剤》……。駄目だ。
俺の植物族専用蘇生カード及び植物族リリース効果が全く使えないことを示していた。

第7話　盲点（後書き）

正直相手を何デッキにするか悩みました。
《アンデット・ワールド》軸のアンデットデッキ。
これがある種植物族のメタになるのでいいかなって使わせていただきました。
以前のオリカを含め、紹介していかないとまずいですねｗｗ
合間縫ってやっていきたいと思います。

《アンデット・ワールド》を前にセナはどう立ち向かっていくのか、
そしてテストの結果は……！？
それではまた、次回お楽しみに！

第8話　さらなる高みへ！（前書き）

どうもお久しぶりです、愁彩です！

まだまだ6月というのにこの暑さ……。

この暑さに負けないくらいの熱い小説を……。

かけたらいいなって。

久々の投稿ですが質が落ちてないと……いいなぁ。

それでは第8話、どうぞ！

第8話　さらなる高みへ！

「……《アンデット・ワールド》か。」

辛い。フィールド上と墓地のすべてのモンスターがアンデット族に変わってしまうなんて状況はこのデッキを使っているときは初めてかもしれない。

もしもあのデッキだったならば……。

（《アンデット・ワールド》で封鎖されたのはわらわの能力、そして一部の僕のみじゃろうが。まだあきらめるのには早すぎるのじゃ。）

「うーーむ。」

といってもあれを破壊しないとどうしようもない。植物デッキの定番展開カード、《ローンファイア・ブロッサム》がまるで使い物にならないし、墓地までアンデットになってしまうとなると《スポーア》効果も使えないだろうし……。

「つってもモンスター効果で破壊する手段がないからサイクロン待ちになるんだよな……。」

それまで耐えきれるかって話だ。相手はまだ手札が5枚ある。こっちがもしひっくりかえせたとしても再び形勢逆転されるかもしれない……。

「俺はモンスターを1体セット、カードを1枚セットしてターンエンドだ。」

でもやるしかない。相手がどうでるかわからないけど次で仕掛けられなかったらこのまま負けてしまう……。

「俺のターン、ドロー！……。俺は《カードガンナー》をリリースし、《真紅眼の不死竜》をアドバンス召喚！」

《真紅眼の不死竜》……。また厄介なカードを……！

「バトル！《真紅眼の不死竜》で裏側のモンスターを……！」

「罠カード発動、《デッキ・ブロック》！！」

「……！？なんだそれは……。」

「相手が攻撃宣言したときに発動することができる！デッキから5枚墓地に送ることで相手の攻撃を1度だけ無効にする！！」

「……。なら《死神の龍　アンデッドドラゴン》で攻撃！」

「《プチトマボー》だ！効果によってデッキから《プチトマボー》2体を特殊召喚する！！」

「……。そう来たか……。カードを2枚伏せてターンエンドだ。」

ん……？2枚？

そういやさっき5枚だったんだよな。おそらくドローしたのが《真紅眼の不死竜》……。

もしかして……？

「どちらにしろ、お前が来なけりゃ話にならないけどな……。」

でも俺は確信している。なぜかわからないけど絶対来る。そんな感じがする。

勝利をつかむためにも……！！

「なぁ、名前は？」
「俺のか？俺は節乃（ふしの）　智明（ともあき）。お前の先輩にあたるな……。」
「節乃先輩。確かに俺のデッキは種族デッキ。しかも《ローンファイア・ブロッサム》に完全に頼り切っていたとしたら《アンデット・ワールド》で封殺できる……。」
「負けを認めるのか？潔いな……。」
「しかしそれは頼り切っていた時の場合だ。」
「……！？」

《ローンファイア・ブロッサムの効果は非常に強力なもの。デッキから植物族モンスターを特殊召喚することができるからだ。
正直、前までの俺のデッキだったらそのカードに頼りきっていた。
いや、頼りきるしかなかった。だってこの世界にしかないカードがなかったから。

「こっちにきてますますデュエルを楽しむことができる……！！俺のターン、ドロー！！」

……ディリオン。

（キャウッ！）
「さすが、いい子だ……。俺は《ダンディライオン》を攻撃表示で召喚！！」
「攻撃表示……？」
「あぁ。《プチトマボー》はチューナーだからな！！」
「レベル５のシンクロモンスター……？」
「いや、レベル７だ！！《プチトマボー》２体と、《ダンディライオン》でシンクロ！！いでよ、《椿騎士ーカヴァリエ》！！」

「《椿騎士ーカヴァリエ》！？」
「こいつはフィールド上に存在するレベル２チューナー２体とチューナー以外のモンスター１体以上でシンクロ召喚することができる、このモンスターの攻撃力は自分フィールド上に存在するレベル２以下のモンスターの数×２００アップする！」

椿騎士ーカヴァリエ
攻撃力２６００→３０００

「し、しかし今の《死神の龍　アンデットドラゴン》の攻撃力には届かない！」
「効果はこれだけとは言ってないぜ？」
「何っ……！？」
「１ターンに１度、フィールド上に存在するレベル１モンスターをリリースして相手フィールド上のカードを１枚破壊する！！俺は綿毛トークンをリリースして《死神の龍　アンデットドラゴン》を破壊する！！」
「……っち！」

椿騎士ーカヴァリエ
攻撃力３０００→２８００

「バトル、《椿騎士ーカヴァリエ》で《真紅眼の不死竜》に攻撃！！」
「ぐぁぁぁぁ！」

節乃
ＬＰ４０００→３６００

「このとき、罠カードを発動する、《ダメージ・コンデンサー》…

…！デッキから《破滅の不死玉》を特殊召喚する……！」
「……！？」
《破滅の不死玉》……？
ものすごく禍々しい。そして恐ろしい……。何もかもを食らいつくすような……。
「カードを１枚セットしてターンエンド……。」
「俺のターン、ドロー……！」
ふと、節乃先輩がにやりと笑ったような気がした。
「《破滅の不死玉》の効果を発動……！フィールド上に存在するカードをすべて破壊し、そして俺はその数×２００のダメージを受け、その数以下の攻撃力をもつアンデット族モンスターを特殊召喚する！！」
「何っ！？」
「ぐぉぉぉぉぉ！！」
節乃
ＬＰ３６００→２６００
「墓地から、《地面から出てきたゾンビ》を特殊召喚……。モンスターを１体セットしてターンエンド。」
「《地面から出てきたゾンビ》……。」
どんな効果だろうか……。ボードアドバンテージを稼ぐようなカードか、リクルーター、アンデットなら蘇生効果持ちかもしれない。
「でも、《アンデット・ワールド》を破壊してくれたから、２体な

んてどーとでもできる！！俺のターン、ドロー！！」

これで一気に決めてやる！！

「俺は墓地の《スポーア》の効果発動！《ダンディライオン》を除外して《スポーア》を特殊召喚する！こいつのレベルは４！そして手札から《ＤＤＲ》を発動！！手札を１枚捨てて除外されている《ダンディライオン》を特殊召喚、そしてシンクロ！！」

フィールド上の一掃なんて相手だけができる芸当じゃない、俺だってできるんだ！！

「黒薔薇の龍よ！漆紅の翼ですべてを薙払え！！シンクロ召喚！！咲き乱れろ、《ブラックローズドラゴン》！！」

「黒薔薇の……龍……！？」

「効果により、フィールド上のすべてのカードを破壊する！”ブラックローズデストラクション”！！」

「何っ！？」

「そして俺は《ダンディライオン》の効果により、綿毛トークンを特殊召喚、そして手札より《増草剤》を発動！！墓地から《椿姫ティタニアル》を特殊召喚する！ティタ、来い！」

（またここに戻ってくるのに時間がかかったのう……。）

「うっさい、戻ってこれただけよしとしとけ！」

正直（アンデットワールド）を自ら破壊するなんて想像にもしてたかったし。

「まぁ、これで長かったデュエルも終わりだ、バトル！！《椿姫ティタニアル》でプレイヤーにダイレクトアタック！！”カメリア・リーフ・カッター”！！」

「ぐあぁぁぁぁぁぁぁ！！」

節乃
ＬＰ２６００→０

「そこまでっ！勝者、椿聖苗！！」

「ふーー。あぶなかった……。」
「まいったな……。一気に崩されてしまうとは……。」
「いやいや、節乃先輩のプレイングミスがなかったら確実に負けていましたって。」
「……いや、どっちにしろ負けていた。そんな気がする……。」

節乃先輩はそういうと少し笑った。

「今年の新入生は面白い逸材ばかりだな！また戦おう、《赤椿の騎士》！」
「……椿セナです。」

正直まだ《赤椿の騎士》と呼ばれるのに違和感を感じる……。

「お、お疲れ様です、セナさん……！」
（ピギッ！ピギィ！！）
「お、ヒカリか。どうだった？」
「えっと、ここにきて初めて勝ちました！」
「おぉ。よかったじゃないか。」
「えへへ……。」

初めてって大げさなんじゃないかなって思うけど、《神光の宣告者》使ってながら勝てないからねぇ……。現実みたいにそろってたら別だろうけど、そうそうこの世界でああいうデッキを作れなさそうだしな……。

「でもまぁ、進歩してるからいいよな。」

「ふぇっ！？」

ヒカリの頭を撫でてみた。

結構撫で心地いじゃないか……。癖になりそう。

（主人。そなたも勝ったとはいえ、課題が大いにのこったじゃろ。）

「……。」

「えっ？なんです……？」

「……気にすんな。」

正直言って、種族を縛ってくるやつがここから先出てくることは確かだろう。ああいう場で明らかに弱点ですって言っているようなことをしていちゃ次から対策される。植物族の制限でなくてティタが言っているようにシリーズもので戦う方が弱点が減るのは間違いないだろう。

「問題はどうやって手に入れるか、だよな……。」

「コホン、今回のテストもすばらしいデュエルが見れて大変よかっ

たです。その中でも……。」

テストが終わると校長先生の講評があるんだっけな。

「そこで、椿聖苗くん。」

「はぃっ！？」

「明日から君はオベリスクだ！」

「お、オベリスク……！？なんで急に？？」

「話を聞いてなかったんですか。成績、そしてデュエルのプレイング。今のアカデミアでも最高クラスの出来です。あの丸藤亮にも匹敵する成績でしょう。だからオベリスクブルーへの昇格を認めます！」

「うーーーん……。」

オベリスクへ行って利点とかあるのか……？あの広い部屋よりも広いところなんてなさそうだし……。

（調べものするにはちょうどよかろう。上がってもいいとおもうのじゃ。）

「……お前がいうならそうするか。わかりました！！」

パチパチパチパチ！

拍手に包まれて、テストは無事終了した。

「《ブラックローズ・ドラゴン》の所在は確定的になりました……。」

「そうか……。」
「隙をみて、闇のデュエルにて関係者を排除し、奪取するつもりです……。」
「まかせたぞ……。」

本当の戦いはこれからということは、俺たちはまだ誰も知らなかった。

第8話　さらなる高みへ！（後書き）

本当の戦いはこれからなんです！

おそらくここから先はオリカじゃんじゃんでます。

というよりオリカでのみ構築されたデッキとか出てくるでしょう。

おそらく。

話は変わりますが、オリジナルの小説の方のネタがまとまり次第、新しい方も書きたいと思います。

受験生ですがやれるだけやろうと……。

それでは次回、いつ更新するかわかりませんが、お楽しみに！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0793n/

遊戯王～赤椿の騎士～

2011年8月15日19時11分発行